

イーグルジャンプサバ ゲ一部

あはとあはと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

阿波根うみこ他にもミリタリー、サバゲーが好きな奴がいたら。そう言う話です。

目次

趣味	1
歓迎その1	12

趣味

「はあ、はあ、はあ」

走る、その手には愛銃である俺の手でフルカスタムしたP90を抱え、森の中をひた駆け巡る。

頬を滴る汗、現在俺は敵陣地の裏どりのためにステージの外側を遠回りして走っていた。これから敵を一網打尽にできるかもと言う期待、敵陣地に突っ込んでいるという興奮。つまるところ、サイコーにハイってやつだった。

今回は、この広い森林ステージが売りのサバゲーフィールドに会社の同僚と来ていた。腕前に関してはお互いライバルであると認めているので、今回も敵同士となった。

ゲームの形式は殲滅戦。先に全滅した方が負け、全滅させた方が勝ちという一番シンプルなゲーム形式となっている。

(ついた)

ジャケツトの袖で乱暴に汗を拭う。木の陰に身を隠し、敵陣地の背後を伺う。

どうやら、アタツカー（最前線で戦う人。目立つ代わりに当然リスクも高い）は全員出払っているらしい。

(スナイパーが2の4の……5人か)

少し体乗り出し、銃を構え、いちばん手前の草むらで伏せているスナイパーに照準を合わせる。

ふう、と一呼吸してから引き金を引く。

一直線に飛んで行ったBB弾はアンブッ^隠ッシュ^れして^ていた^たスナイパーの左ももの辺りに見事に命中した。

「ヒットー！」

(ゲットー！)

すかさずスナイパーが片手を上げて立ち上がる。どこから狙われたんだろう、と言いつつ、周囲を伺いながらセーフティーゾーンへと向かう。

いわゆる、ゾンビプレイヤーと言われる当たったのにゲームを続けるというマナー知らずも居るのだが、このサバゲーフィールドにはそう行つた人は居ない。ルールを守って楽しくサバゲー、お兄さんとの約束だぜ。

「ふう」

一息つく。いい調子だ。このまま敵陣地を喰い破つてやる。

草木に紛れながらどんどん敵陣地の中心へと距離を縮める。

このフィールドには各陣地に一つづつ中規模のやぐらがある。やぐらの上は、周囲を監視、狙撃するのに最適であり、戦闘において上を取れるというのは大きなアドバンテージとなる。

（突っ込もう）

特に小さいと有名のP90でも、この狭い空間では扱い辛くもなる。なので、メインアームのP90を肩にかけてしまうと、サイドアームであるハイキャパを引き抜く。中腰で構えながら、ソロリソロリとやぐらの足元まで近寄る。物陰から階段を除くが誰もいない。

つま先からゆっくりと足を下ろし、まるで忍者のように一歩づつ慎重に階段を登る。

顔を覗かせて中を伺う。中には二人。しかも、スナイパーライフルを構えたまま。

（行ける）

呼吸を整えてやぐらの上へと飛び込む。同時に二つの人影に向けて引き金を連続で引く。

「ヒットー！」

「同じくー」

そして、見事球が命中したことを裏付けるように、スナイパー二人が手を挙げながら階段を降りて行った。

もしかしたら、これはゲーム内MVPもありなのでは？そう思い、上からフィールドを俯瞰しようとしたその時

「チエックメイト、ですね」

後ろから声をかけられる。なんとなく自分がどういった状況に置かれたのか分かってきた。

ハイキヤパを傷つけないようにゆつくりと床に置くと、両手を挙げる。同時に中腰だった体も持ち上げて、後ろを向く。

「全く音しなかったぞ、うみこ」

目の前でハンドガンの銃口をこちらに向けていたのは、同じ会社に勤める同僚、いつもフラフラしている上司に振り回されている同盟でもある阿波根うみこ。小麦色の肌茶髪のロングにスラっとしたスタイルの女性だ。

「今回も私の勝ちですね」

「嘘をつくな。前は俺がスナイパーで当てたじゃねえか」

「私の隣の人を狙った弾が、風で流されたのが当たっただけです」

「そういうことにしといてやるよ」

うみこの引き金が引かれた。

発射されたBB弾は俺の太ももに命中する。

「何しやがる!」

「いえ、倒しておかないと私の戦績になりませんしね。それに、約束覚えていますよね
?」

「くっ、撃破された方が飯を奢るだったか」

「ええ、そうです。なので今夜、早速ですが打ち上げで飲みに行きましょう、阿瀬さんの奢りで」

「わーったよ!」

俺も男だ、男に二言はない!

それじゃ、残りがんばれよー。そう声をかけて俺は財布の中身を思い出しながらセー
フティーズゾーンへと向かった。

「かんぱーい」

夕刻。俺とうみこはサラリーマンの人だったり、私服を着た人だったり、私服を着た人だったり、いろいろの居酒屋の隅っこに陣取って、周りの声に混じるように声を上げる。

お互い、帰りもあるので今日は酒はなしとなっていた。(うみこに酒を飲ませると確実に破産するという経験談からなんとか説得)

「お待たせしましたー、やきとりセットと冷やしトマトです」

ゴトンゴトンと大皿に盛られたやきとりと冷やしトマトが卓上へと並べられていく。
「ごゆっくりー」

店員が去っていくのと同時にやきとりに手を伸ばす。もも肉を二、三個まとめて口に放り込む。焼きたてというのもあり、パリッとした食感に溢れ出す肉汁。タマラねえぜ。ビールを飲めないのが残念で仕方がない。

「やはりこのやきとりは美味しいですね」

すみません、カシラと皮下さいと容赦なく注文を重ねるうみこ。そんなうみこを若干

睨みながら冷やしトマトに手を伸ばす。

うまい。

「あ、そういえば。今度新入社員来るっていつてたな」

「もうそんな時期ですか。たしか、キャラデザでしたか？」

「女性？」

「たしかそうですね。葉月さんが持ってた書類を少し覗きましたから。たしか、涼風青葉さんだったか」

「もしかしたらあの空間からでられる!？」

わーい！と言いながら万歳をする。おいうみこ、そんな目で俺を見るな。

そう、何を隠そう我らが勤める会社、ゲーム開発を主に手がける『イーグルジャンプ』は何故か女性社員の比率がおかしいのだ。かくいう俺がいることから分かるように、男性もいるのだが、ごく僅かだ。

何故喜んだのか。

それは現在の俺のデスクの場所が原因だ。俺こと阿瀬宗次郎はキャラクターの動きを吹き込むモーション班のチーフを務めているのだが、何故かデスクが隣のキャラデザ班の所にあるのだ。しかも周りは俺以外全員女性なのだ。

これを機に俺のデスクが移動になれば――

「無いと思います」

「へ？」

「だから無いと思いますよ、移動。だってデスク余ってましたから。たしか、飯島さんの隣だったか」

「ば、馬鹿な……」

そう言われてみれば確かにあその席は空いていた気がする。くそ、なんてことだ。

「そもそも、あなた葉月さんよお気に入りじゃないですか。多分、動けませんよ、あの人がいる限り」

holly sit!

なんてこった。俺があの人に入られている？そんな馬鹿な

「そもそも、あなたがイーグルジャンプに来たのも葉月さんが○○ゲーム開発からあなたを引き抜いてきたからじゃ無いですか。そこまで気にかけてるんです、気に入られてるのは明白でしょう」

「ですよねー」

「そもそも、あその席になったって、モーション班から追い出されたからじゃないですか。何でしたっけ、『銃を扱うようなゲームを作っているわけでもないのに露骨なアピールがウザい』と。そこでモーション班の人の話を聞いた葉月さんがあなたをあそこ

へ連れていったと」

「そ、そういえばそうだったな……」

ドリンクをちびりと飲む。

「そもそも、あなたは実力もありますし、人としてもしつかりとしています。嫌われて追
い出されたわけじゃないのですから、その性格さえ直せば戻れると思いますよ」

「お前は俺のこの性格が治ると思ってんのか？」

「無理ですね」

わお、返事早すぎ。少しは考えてくれてもいいのに。

そんなことを考えていたその時

「うちの班のデスクなら開けてあるというのに」

「なんか言ったか？」

「何でもないですー！」

なにかいってた気がしたがかよく聞こえなかったので聞き返したら、一体どうしたつて言うんだ。

うみこはグラスに入っていたソフトドリンクを一気に飲み干すと

「すみません！これとこれ、ロックで」

「かしこまりましたー」

メニューの酒の欄から二つほど少しお高いのを指差し、注文してしまった。

「おい待て待て！お前さっきの約束は!？」

「人の気持ちも理解できない人の言うことなど聞く耳を持ちません！」

「おま、それどういうー」

「お待ちどー」

「ーぎやああああー!？」

机に置かれたお酒の入ったグラスを乱暴に掴むと煽るように飲み始めた。

「おい待て待て待てしてくれよ！誰がお前の面倒見ると思ってたんだよ！」

「明日からまた仕事ですし！葉月さんはどうせまた仕様変更といつて来るだろうし！今

日くらいは呑みます！」

そう言うのと、二つ目のグラスに手をかけた。

「ぎゃあああああ！ヤメロオオ！今月ちよつとやばいんだって、
て聞いてようみこさあ
ん!？」

男性の鳴き声と雄叫びが夜の帳へと消えていった。

歓迎その1

『春』

桜が舞い、日本では色々なものの新たなスタートをきる季節。

例えば

学校に入学することだったり新学期を迎えることだったり。社会人として大人の仲間入りをすることだったり。

かくいう俺の立ち位置は新社員の先輩であり上司。新たな一步を踏み出す社会人諸君を迎え入れる季節である。

しかし、ゲームの制作がスタートしているため、いつもと変わらない日程を送っている。ゲーム制作は、計画通りにやらないと全てが破綻する。それは企画の段階からそうだし、キャラクターデザイン、モーション制作、プログラミング、動作確認など一つでも滞ってしまうと全てがダメになってしまうのだ。

そう、なんら変わらない日常。

「宗次郎君、ここのモーションなんだけどき。こう、こんな感じで動かした方がかっこいいと思わないかい？ こういうかんじできつ！」

なんら変わらない

「あと、ここの仕様なんだけど、キャラデザにデザインの設定変更を頼んでしまったね。手の動きをこの仕様書通りに変更してもらえないかい？」

なんら

「それと、ここのドアを開けるモーションなんだけど、もつと重厚感を出した方が良くないかい？」

……………

頭を真つ白にする。何も考えるな。今は葉月^{こい}さんを…………

今もまだ俺の異変に気づかず、先ほどまで剣を振るうような動きをやめ、首をかしげる我が社のゲーム制作ディレクター。ディレクター、作品を作り上げて行く上での監督、これが、か…………

幽霊のようにフラフラ立ち上がると椅子の後ろから覗き込むように俺の操作するディスプレイを見ていた葉月の方を向くと腰につけられたホルスターに手を伸ばす。

「ん？ どうしたんだいー」

バスン！

「ーんんん!?!」

何年も練習し続けたクイックドロウのスキルを余すことなく活かしてホルスターから愛銃である東京マルイ『ハイキャパ』を引き抜くと迷うことなく引き金を引いた。

もちろん、サバゲーマーのマナーとして銃口を人に向けることなどしない。葉月の足元、の少し前を狙って発射されたBB弾は跳弾し、葉月のおでこのど真ん中に直撃した。「いった〜……」

若干涙目になりながら両手でおでこを抑えている目の前の葉月諸悪の根源を見れば幾分か胸の内がスカツとするがこんなものではまだ足りない。

ビス、ビス

続けざまにもう二発発射。今度はおでこを抑える両方の手の甲に直撃した。

「~~~~~っ!?!」

「今の三発は葉月さんが俺に頼んできた仕様変更の数です。急な仕様変更はやめろくださいと散々言いましたよね?」

「しかしだね宗次郎君。より良いゲームを作るためには、あふん」

何か言っていたのだろうか。もう一発行っておく。静かに悶絶しながら心なしか口調までも変わってる気がうごごこ、と呟く葉月を横目に見ながらため息をつく。

しかし、こんな感情が湧き上がってきてしまっているのも俺がこのゲームを愛してい

るからなのだろうか。

「はあ、八神と遠山、あとうみことその他チーフには俺が掛け合つときます。会議をしましょう。仕様変更についての書類、持ってきてください。話し合いをして、できそうだったらやります。ただし、全部できるとは言えませんので。」

「さすが宗次郎君！ やっぱり君は——

「ただし」

「——ん？」

ハイキャパをホルスターに戻す。代わりに手を銃のような形にして、人差し指を葉月のこめかみに突き刺す。

「いっただだ」

「次こんなことしたら本気で、物理的に吊るし上げますので」

「よろしく願いますね」

「は、ひ」

なんだかここ最近で一番の笑顔を浮かべていた気がするが気のせいだろう。

ちなみに現在の状況を説明すると。

朝の10時。夜遅くまで朝遅くの勤務が主であるゲーム制作会社ではぼちぼち社員が出社してくる時間だ。

俺は昨日振り付けたモーションに納得がいかず、居残り組として会社で夜を明かした。2時くらいに完成したモーションや周辺データをディレクターである葉月に確認してもらおうと思ひ、葉月のデスクのパソコンで制作結果を見せていて。

冒頭に至る。

そろそろキャラデザ班も出社し始める頃だろう。であるならば

「そおいー」

「むぐ!?!」

葉月の方にかげられた若草色のストールを首が閉まらないように顎から首にかけてぐるぐる巻きにする。それをとってがわりにむんずと引つ掴むとズルズルと引きずる。

「ぶはっ、一体何をするんだい宗次郎君!?!」

「俺のデスクに戻るついでに葉月さん連れてってキャラデザ班にも謝りに行くんですよ。さつき話していた感じでは、キャラデザにも迷惑かけたんでしょう? ついでに仕様変更についてのお願ひ、俺も一緒にしますから」

「い、いやあ。今じゃなくても、ほらーまだみんな準備もできてないだろうし」

「もう一発喰らいたいですか？」

その一言で静かになった葉月をズルズルとキャラデザ班の島へと引っ張っていく。